

“但馬牛”今昔物語

兵庫県立但馬牧場公園 「但馬牛博物館」

館長 渡邊 大直

「新連載によせて」

あけまして おめでとうございます。

昨年4月から但馬牧場公園の「但馬牛博物館」でお世話になることになりました。

すると当然のことながら、色々な人から但馬牛のことを尋ねられ、それに答え、説明しなければならない立場になってしまいました。

しかも、今まで主に但馬牛に関わる人の中で話すことが多かったので、普通に話して通じていた言葉でも、一般の来館者にはほとんど通じない言葉もあることに気づき、「これは厄介なことになった」と思う今日この頃です。

そこで、もう一度「但馬牛」のことを勉強し直そうと思い立ち、本棚から埃を被った本や資料を引っ張り出してきたのですが、なにぶん老眼が進んでいて、老眼鏡をかけて小さな文字を追いかけるのはとても疲れる作業で、すぐ眠くなってしまいます。

また、本や資料の中から知りたいことをピンポイントで探すのは中々大変で、時間のかかる仕事です。

その点インターネットはとても便利です。検索が簡単で、資料に整理するにもコピーができるから、とても効率的です。

ところがインターネットで調べているうちに、『明治時代の洋種交配で、但馬牛は絶滅の危機に瀕し、陸の孤島とも言うべき小代の山奥で奇跡的に洋種の交配を逃れた4頭の雌牛を基に但馬牛は復活した』とか、『「中土井系」は「あつた蔓」の別称』とか、ここには、とんでもない珍事実がいっぱい紛れ込んでいることに気が付きました。

しかも、このような珍事実が別のサイトに取り込まれて、“発信情報”として独り歩きしています。

そうすると少々面倒くさくても、精度の高い本や昔の資料を調べなければならないということになります。

ところが、例えば「但馬牛物語」は昭和54年に発行されましたが、それ以降に見つかった資料によって「新但馬牛物語」では修正された部分があります。

また、改良や飼育に関わる技術が進み、それまでとは違う新たな視点が生まれたことにより、「続但馬牛物語」に書き加えられたこともあります。

こうなると、本にしても、そのまま正確な情報として捉えて良いものかどうか、とても悩ましく『相当腹を据えて勉強し直さないと、但馬牛が歩んできた道を正しく理解するのは大変だなあ』と思います。

ちょうどそんな折りもあり、畜産兵庫の編集に携わる機会を得て、新年号から但馬牛の歴史について連載の読み物を担当することになりました。

まだ勉強を始めたばかりで、その任にあらずと思うのですが、但馬牛が歩んできた道を整理し、理解するには良い機会を与えてもらったと思い、書かせていただくことにしました。

畜産兵庫読者の皆様方のご批判をいただくことにより、より正確な但馬牛の足跡を整理できると思いますので、宜しくお付き合いをお願いします。
(前県立農林水産技術総合センター所長)

【筆者プロフィール】

昭和56年4月、兵庫県職員となる。これまでに畜産課肉用牛係長、畜産課長、淡路県民局地域振興部長、畜産技術センター所長、農林水産技術総合センター所長を歴任。平成27年3月、兵庫県を退職。

現在は、但馬牛博物館長、農林水産技術総合センター顧問、兵庫県畜産協会副会長などに就任。

昨年6月からは畜産兵庫編集委員長。美方郡新温泉町(旧浜坂町)出身。